

【新平の検疫事業Ⅱ】

新平を取り上げたマスコミの視点

新型コロナ感染拡大防止のため、本館も4/18～5/8まで臨時閉館しました。「緊急事態宣言」が発令されている現状では、新企画展もままならないため、当面、継続中の「緊急特別企画展」関連情報を掲載します。

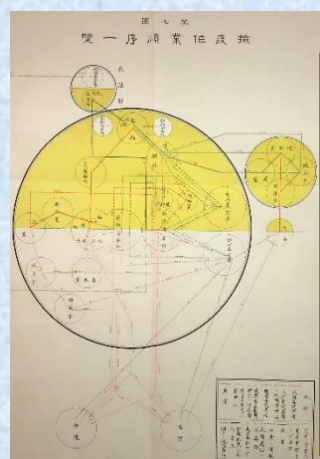
2019年 12月	2020年 1月	2月	3月	新平の業績に注目	4月
中国湖北省武漢市 肺炎患者集団感染報告 新型コロナウイルス 世界を震撼	1/16(木) 日本で初めての患者報告 1/22(木) 厚生労働省発表資料 【国内】感染者1名 【国外】感染者445名、死者1名 肺炎患者集団感染報告 1/29(水) ナンタラ一週(第1巻) 韓国 1/30(木) 世界保健機関(WHO)緊急事態宣言	2/1(土) 日本で指定感染症に指定 2/3(月) 検疫所に到着したクルーズ船 2/21(金) 厚生労働省発表資料 【国内】感染者19名、死者1名 【国外】感染者75名、死者224名 2/25(金) 政府基本方針発表 2/27(土) 官報 全国の学校休校要請(7-8時) 2/28(金) 官報 全国の学校休校要請(7-8時) 2/29(土) 官報 全国一律の学校休校要請(7-8時)	3/8(日) 水沢テレビ取材-3/9放映 3/9(月) 水沢テレビ取材-3/10放映 3/18(土) 胆江日日新聞取材-3/21掲載 3/19(日) 岩手日報取材-3/21掲載 3/19(日) 岩手日日取材-3/29放映 3/21(火) 胆江日日新聞取材-3/21掲載 3/22(日) 読売新聞取材-3/27掲載 3/24(日) 水沢テレビ取材-3/25放映 3/24(日) 水沢放送局取材-4月号掲載	3/8(金) 中国、春節の人数前に2週間待機要請 3/8(金) PCR検査、公的医療保険適用開始 3/10(日) イベント自前10日原稿執筆要請 3/11(月) WHO(H)パズーニツツノ宣言 3/13(水) 東京2020オリンピック延期決定 3/13(水) 人山と「フラスター」移動制限で発生 3/20(金) 厚生労働省発表資料 【国内】感染者202,512名、死者9,884名 【世界】感染者2,425,732名、死者168,688名 3/24(木) 東京五輪1年程度延期 3/25(金) 小池百合子「感染対策徹底大断行」 3/29(日) 志村けんさん、新型コロナウイルス感染死去 3/30(月) 小池百合子「感染対策徹底大断行」	4/1(火) 官報 全国全世帯に布マスク2枚配布 4/2(水) 世界の感染者が100万人を超える 4/3(木) 国内の感染者が100万人を超える 4/4(金) 新型コロナウイルス感染症緊急対策会議 4/5(土) 人と人の接触7-8割削減呼びかけ 4/6(日) 緊急事態宣言(全国適用)開始 4/7(月) 国内の死者200人超、感染者1万人超 4/8(火) 後藤新平記念館特別展「〜5/7〜」 4/9(水) 世界の死者20万人超 4/21(火) 厚生労働省発表資料 【国内】感染者11,119名、死者186名 【世界】感染者2,425,732名、死者168,688名 4/23(木) 産経新聞「後藤新平の検疫事業を知る・奥州 コロナ関心高く特別展」 4/24(金) 岩手朝日TV「今こそ知りたい先人の偉業」 4/25(土) IBCラジオ取材-4/16放送 4/26(日) 胆江日日新聞取材-4/26放映 4/27(月) 読売新聞取材-4/27掲載 4/28(火) 水沢テレビ取材-5/1放映

壁に掲示した新型コロナ関連情報と後藤新平を扱ったマスコミ（取材含み）情報一覧。（当館入手情報に限定）
（今回は、これらの情報のタイトル等から、後藤新平をどのように扱ったかという視点で紹介します。）

- 2/18(日)：産経新聞(産経抄)：歴史的に検疫に携わった人物、野口英世・北里柴三郎・後藤新平・長与専斎をシリーズ化し、紹介。「日清戦争で復員将兵の検疫業務で辣腕をふるい、陸軍次官児玉源太郎の目に留まった。」
- 2/22(土)：産経新聞(河崎真澄(元台北支局長))：令和の後藤新平いないのか。台湾で揺らぐ「日本衛生神話」
- 2/24(月)：産経新聞(小池百合子)：コレラ激減の功績大。「感染症対策総力あげて」
- 2/25(火)：岩手めんこいTV：伝染病の拡大阻止した125年前の「大規模検疫」水際作戦、スピードと実行力に学べ
- 3/9(月)：水沢TV：大規模検疫事業に奮戦 後藤新平
- 3/19(木)：産経新聞(渡辺利夫)：緊急事態への対処・明治の教訓・2人のリーダー児玉と後藤・非難と憤懣を乗り越え・気概をもって事態に対処
- 3/21(土)：胆江日日新聞：震災復興に続き新型コロナでも・再び高まる「新平待望論」・日清戦争後、大検疫を指揮
- 3/21(土)：岩手日報：後藤新平 防疫で手腕・奥州水沢の記念館特別展・コレラなど流行抑制・日清戦争帰還兵対象
- 3/25(月)：水沢TV：緊急特別展で紹介 後藤新平の検疫事業
- 3/27(金)：読売新聞：後藤新平の検疫事業知る・奥州 コロナ関心高く特別展
- 3/29(日)：岩手日日：125年前に軍隊検疫を指揮・後藤新平の功績を紹介(特別展)
・スピード感ある対応と統率力
- 4/3(金)：岩手朝日TV：今こそ知りたい先人の偉業
- 4/10(金)：文芸春秋5月号(小池百合子)：後藤新平の水際対策を見本に・スピード感と規模感・国家や国民が総力をあげて「大車輪」で「私権制限」が難しい中で・東京都の威信にかけて
- 4/12(日)：読売新聞(北岡伸一)：後藤新平に学ぶ・政治にビジョン不可欠・インフラ 災害に備えを
- 4/16(木)：IBCラジオ：125年前、疫病対策で功績をあげた奥州市水沢出身の偉人「後藤新平」



5/12「テレ朝ニュース」より



【緊急特別企画展から】

【検疫作業順序】

- 検疫作業の8分類
 - (1) 船舶検査科 (入港した船舶を検疫し、伝染病患者もしくは死者の有無の確認)
 - (2) 運搬科 (船舶を離れて人員・荷物・患者等の検疫)
 - (3) 沐浴科 (健康な人員は、こごとく消毒風呂に入る)
 - (4) 熱気消毒科 (検疫事務科消毒の主眼。被服荷物で蒸気消毒に堪え得るものは全て消毒)
 - (5) 薬物消毒科 (武器、携帯品、諸荷物の蒸気消毒に堪えられないものを消毒)
 - (6) 船舶消毒科 (病室汚染の疑いのある船舶に対し、その一部もしくは全部を消毒)
 - (7) 焼却科 (死体、汚物、及び物品)
 - (8) 停留舎 (輸送船中に一人でも患者がいて、病室汚染のおそれのある者は、一時停留舎に留められる)
- 検疫作業の流れ

停留人の診断 → 疑わしい患者 → 疑症室 → 沐浴消毒 → 治療

伝染性患者 → 避病院 → 治療

【患者輸送船護送醫員心得】

第九 患者輸送船に收容する時は、その病症と軽重とによって病室を区別し、その病床に就かせること。そして中床がある室においては、重症者を下床に軽症者を中床に就かせること。伝染病患者とその他の患者とは、その室を異にするべきはもちろぬ、その携帯品及び付託品等も区分し、混合しないこと。(後略)

【検疫作業順序一覧 『臨時陸軍検疫部報告摘要』 附図 第七図】

白山丸の惨劇

(『正伝 後藤新平』より)

惨状を究めた現場、それに対応する医師たちの壮絶な対応が読み取れます。
このHP用に現代語訳でまとめました。最先端の現場で働く方々へ思いを寄せて。

6月1日、検疫所を開始した時は、あたかも第二軍凱旋の大輸送の時期に際会し、検疫所はその当日から繁劇〔多忙〕を極めた。爾来、陸續として入港し来る軍用船のなかには、コレラ病を載せて来る船舶が予想外に多く、その数は112隻に及んだ。そのうち最も多く患者を出したのは、白山丸、旅順丸、新発田丸、伏木丸、神洲丸、東英丸、神城丸等であるが、なかにも白山丸は、酸鼻〔悲惨〕の極であって、人をして眼を蔽わしむるものがあった。

白山丸が大連港から、歩兵第七連隊第一大隊の全部を載せて、似島検疫所に入港したのは、6月29日であった。しかもその入港した時には、すでに72名のコレラ病者を発生し、内12名は航海中に死亡していた。『白山丸検疫報告書』によれば、次のとおりである。

該船〔その船〕は6月24日午後3時30分大連湾を発し、風雨を冒して進航し、27日午後4時45分巨文島付近にいたったころ、船長は船内にコレラ病患者が1名あることを聞き知り、その真偽を輸送指揮官に質したところ、指揮官は船長がまだ死者があったことを知らないのをいぶかり、隊付毛利一等軍医を呼び、その始末を語らせた。ここにおいて船長は初めて、午前11時に吐瀉患者が発し、これを隔離しないまま、午後1時に死亡したことを知った。これより後、同患者が続々発生し、下関にいたるまで37名を発生し、うち6名が死亡した。よって彦島検疫所に患者および死者を総て皆揚陸することに決し、28日午前9時揚陸を終わった。同日午後2時25分下関を出航。翌29日午前5時25分当の似島にいたるまで、さらに新患者35名を発生し、うち5名が死んだ。以上述べたように、該船における病況は極めて猛烈であったので、小官検疫後、直ちに軍隊表の停留および検疫停船を命じ、急速に上陸させた。該船乗組軍隊が検疫所にいたるとすぐに、未消毒棧橋付近より次々に新患が発生し、沐浴後停留舎にいたるまで43名という多数に及んだ。停留中、また多数の新患が発生し、実に次のようになるにいたった。6月30日(患者数20人)7月1日(100人)2日(31人)3日(20人)計180人。

しからばなぜに、かかる惨状を呈するにいたりたるか。『臨時陸軍検疫部報告』は、次のごとく記している。

航海中コレラ病患者が発生したとき、その吐瀉排泄物をまず亜鉛板製の手桶に受容し、まだ充分に消毒を行わない前に、誤ってこれを転覆し、汚物はハッチ蓋板の間隙より、砂バラストに漏れ出た。その際これを消毒したというが、砂中に吸収されたものであるから、その消毒の効果にいたっては疑いないとはいえず、また本船は船内が一般に極めて不潔であって、航海中は終始雨天であったため、乗員の居室に当てた荷物艙は、ハッチを開放しておくことができなかったため、室内の換気がすこぶる不良であり、臭気甚だしく、その不快は言うまでもない。のみならず、高浪のため、船体は甚だしく動揺し、乗員で船酔を起こさないものはなかった。これらの状況がその伝播を助けた一因であろうと信ずることができる。

さらにこれが似島検疫所に着いた時の惨状、及びそれを急遽処置せる混雑の状態は、『報告』のなかに次のごとく記されてある。

病勢は極めて猛烈であって、鏡検を用いなくても真性コレラ病であることを断定することができた。そして着船当時の景況というものは、患者は船内の各所に散居して、あるいは甲板上に、あるいは居室に、あるいは馬を繋ぐテスリの内に卒倒し、吐瀉物は到る処に散乱していた。その苦悶呻吟の声は船内各室に伝わり、その惨状はほとんど名状できないものであった。乗組軍医は命がけの力を尽してこれを救おうとし、隔離しようとして骨折り努めたが、何といたっても航海中に74名という多数の患者が陸續と暴発するのであるからどうしようもなく、ついに完全な予防救護を尽くすことができなかったという。検疫官はこの状況に接するとすぐに、敏活な運動をもって少しでも早く処置しようと謀り、患者運搬人および解船の多数をもって迅速に送院させ、その一方で健康者は部隊長以下総て速やかに上陸させたところ、点検所、待合室等において更に8名の発病者があり、消毒所から直ぐに送院し、あるいは患者の発生した場所および便所の臨時消毒を行う等、一時所内全般に混雑を来した。そして全員消毒を終わり停留舎に移したところ、発病の勢いは一層激しく、日夜絶えず新患者を出し、ついに停留中の発病者は182名を数えるにいたった。このような惨状を呈したため、同船からの停留人には神経性下痢を起こす者が多く、将校下士卒にいたるまで、気は挫け体は衰え、意気憤然としたようであった。

この白山丸患者処置の直接責任者となったのは、似島検疫所の事務官、陸軍一等軍医宇山道碩であった。その提出せる『白山丸検疫報告書』によれば、その後の経過は次のごとくであった。

ここにおいて7月3日、小官(宇山一等軍医)および停留舎付野口二等軍医立ち会いの上、隊付毛利一等軍医および同三等軍医川村健太郎に、同隊一般の健康診断を行わせ、腸胃症のあるもの136名を隔離させた。しかるに該当する隔離者より、4日5名、5日2名、7日1名の疑似症者を発生し、その後ようやく跡を絶ったので、7月10日全隊の解停を命じた。初発6月27日以来、7月10日にいたるまで、総患者数303名、うち死亡70名であった。

こうして白山丸の醸し出した惨状も、ようやくにして終熄せしむるを得た。世界未曾有といわれる大検疫所の設けがあつてすら、混乱の状実にかくのごときものがあった。もしその設備を欠きたりしとせばいかん。いわんや白山丸は単にその一例にして、旅順丸、新発田丸以下、これに準ずべき多数の船舶ありしにおいてをや。それが明治10年(1877)西南戦役後の惨禍を、幾十層倍にして繰り返したであろうことは、想像に余りある。伯(後藤新平)が自ら「我臨時陸軍検疫事業ノ功績顯著大ナルヲ」誇りたるもまた、故ありと言わねばならぬ。